

中山道おしながき②

寢覚の床



編集・印刷: 上松観光開発有限会社

画像提供: 臨川寺、上松町、上松町観光協会



木曾川に列を成す巨岩群、また箱状にそそり立つ岩壁。寢覚の床は、古くから奇勝・名勝として旅人たちが足を止めた場所です。景勝地としての起源は定かではありませんが、箱状に割れる花崗岩の「方状節理」や、水流が岩を動かして刻まれる「甌穴（ポットホール）」が見られる場所として、地質学上でも重要な地形に位置付けられています。

江戸時代までは絵図のとおり、独立した岩の中州がありました。しかし明治時代、木曾川に水力発電のダムができ、後に愛知用水や発電用水のトンネルが木曾川の右岸を貫くと、本流の水量が大きく減り、浦島堂まで歩いていける現在の姿になりました。水量が下がったことで巨岩の立体感は増したのですが、現在でも降雨やダム放流による増水時には、浦島堂の中州が孤立するため、水難事故に注意が必要です。

こんな山奥に、なぜか浦島伝説が残っています。この地に残る伝説は、「竜宮城から帰った浦島太郎が、玉手箱を開けて翁の姿になり行方が途絶える」という場面の物語。浦島太郎は釣りをして過ごし、竜宮城から持ち帰った書物で仙薬を作り、地元の住民に親しまれていたとされます。木曾川では中津川市山口（旧山口村）に乙姫岩の伝説が、また日本各地に浦島太郎の伝説が残っており、その南端はフィリピンにまで達するという調査があります。浦島太郎に例えられるモデルとなる人物が、各地にいたのかもしれない。不思議な民俗伝承の一端です。

寢覚の床には、他にも数々の伝承が残されています。

(画像は江戸時代に描かれたとされる絵図 臨川寺提供)

寢覚の床 見どころ



【寢覚の床】…木曾八景 寢覚の床の夜雨

中山道木曾路の見所として、江戸時代に「近江八景」になぞらえて選りすぐられた風景です。寢覚の床に雨がしたる物静かな情景が描かれています。

降雨時は河川の増水が予想されます。雨の散策では無理をせず、八景に選ばれた遠景を、風情豊かに楽しむに留めましょう。

【臨川寺】

正式名称は「寢覚山臨川禅寺(しんかくさんりんせんぜんじ)」。浦島太郎が残したといわれる弁才天像を祀り、主に上松東西の小川地区に檀家をもつ、臨済宗・妙心寺派の禅寺です。

浦島伝説の姿見の池のほか、「福得寿」の名をつけて葬られた3尾の狐の物語などが言い伝えられています。境内からの眺望は寢覚の床随一です(要、拝観料)。



【木曾路美術館】

国道19号線沿い、レストハウス木曾路に隣接する近代美術館です。浮世絵「中山道六十九次」の所蔵・展示をはじめ、現代美術の展示会、江戸時代のそばちょこ、大陸の青磁などを見学することができます。

また入口からは寢覚の床に下りられ、テラスからは寢覚の床を一望できます。

【寢覚 宿場跡】

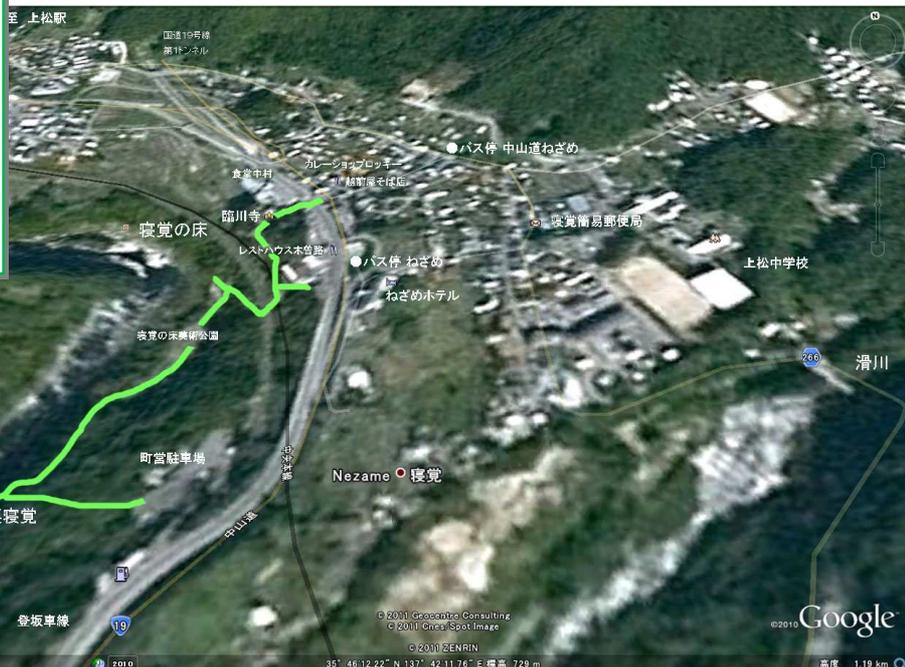
かつて旅籠があった個所です。大名が泊まり高札を掲げたという「立場跡」とも呼ばれ、臨川寺に至る山門の基礎石が残ります。また江戸時代の旅人が長寿を願って食べた、とされる「寿命そば」が、越前屋そば店により伝えられています。残念ながら、かつての旅籠・民宿は営業されておられません。



【浦島堂】

浦島太郎が玉手箱を開いて翁となり、やがて姿を消した後、床岩の上に弁才天の像が残されていたと伝えられています。臨川寺はこの像を祠に祀って建立され、像が残っていた岩の上に「浦島堂」が建てられました。

古い図を見ると、臨川寺の対岸にある床山には「浦島社」というお社が建っていたようですが、床山の北半分は断崖絶壁となっており、現代では、浦島社の存在や痕跡の手掛かりは明らかになっていません。



【寢覚の床 花崗岩の地形】

花崗岩の巨石が連なる寢覚の床は、その景観だけでなく、地質学的な魅力にも満ちています。

箱状に割れる花崗岩の「方状節理」、木曾川の流れが川底の岩を動かして刻まれた「甌穴(ポットホール)」などは、国内でも有名。

また木曾川の流れの激しさは、「象岩」と名付けられている巨石の位置が、少しずつ下流に動いていることでも実感できます。ぜひ足元に注意しながら、巨岩の迫力をお楽しみ下さい。



…正確な道路地図、各地の伝承などは、上松町総合パンフレット「旅する」を併せてご参照下さい。

上松観光開発有限会社 ねざめホテル：0264-52-2245